

2 或る日の学園

早 橋

霜柱が降り、未だ冷え冷えとする空気を、荘重な祈りの声が静かに破る。立教の朝が明けていくのだ。

主よ。我らの口を開きたまへ

我ら主の誉をあらはすべし

神よ。速かに我らを救いたまへ

主よ。疾く来りて我らをたすけたまへ

長老の祈りの声に和して、会衆の声が、大きな聖堂に響き、コダマする。

午前七時といえは、春夏はいいとして、秋冬は身をきるような寒い日がある。しかし、いくら寒くとも、いかなる日でも、チャペルの扉は開かれ、早禱（あさのいのり）が行われる。或る時は、長老にサーバーが一人という日もあるが、殆んど日は学生が十人或いは二十人位参会している。この会衆がじつとひざまづき、神に祈る姿は、敬虔にして、これほど美しい光景はないであろう。そこには、一切の汚れたものを打棄て、ただ、神と自分だけの繋りを求める姿が見られ、人間として

神の祝福をうける姿がみられるのである。神はこれらの子等を嘉し、今日一日の働きに、その力を与え給うのであす。

祈禱が続けられるうちに、聖餐式が始まる。長老がパンとブドウ酒を前にして、

主イエスわたさるる夜パンをとり謝して後これをさき、弟子に与えて言ひ給ひけるは、取りて食せよ、之は汝らの為に与ふる我が体なり。汝ら之を為して我を記念せよ、また夕食おはりし後杯を執りて謝し、彼らに与へて云ひ給ひけるは、汝ら皆この杯より飲め、之は新約の我が血にして、罪を赦さんとて汝ら及び多くの人のために流す所のものなり。汝ら之をなして飲む毎に我を記念せよ。アマメン

と唱える。

会衆は一人ずつ祭壇の前にひざまづき、このキリストの肉と血なるパンとブドウ酒を受けて、キリスト最後の晚餐を記念し、神の子としての喜びを受けるのである。この聖餐式が終ると、各自はチャペルの横にあるルームに集まり、または、チャブレン・ハウズに行つて、和気あいあいとして食事とともにするが、時たま、チャブレンが振舞う熱いウドンに舌鼓をうつこともある。こうしてあけてゆく立教に、朝日がふりそそぎ始めると、そろそろ登校する学生の姿が見え始める。

始業禮拜

カーン、カーンと時計台の下の鐘がうちならされる。ちょうど八時、始業礼拝開始の鐘である。

あたふたと駆け込む学生、悠々とゆく学生、時計台の下でチャペルに出席カンヌウをする学生、ひたすら始業礼拝に向って活動が行われる。チャペルに入って椅子に腰掛けてると、間もなくチーンと鈴が鳴り、学生服の上に黒いハカマをはき、白いカッターをつけた学生を前にして、長老が入ってくる。パイオルガンの前には、既に準備を整えたオーガニストが、キソツクを着て坐っておりオルガンの音とともに聖歌が静かに、しかも力強く流れる。毎日の始業礼拝には五十人位多い時は百人位の出席者がある。この礼拝には聖書朗読があり、クリスチャン学生が交替にこれに當っている。ときどき旧約聖書を読む時、つかえて、うまく読めずにいる学生がいるかと思うと、すらすらと読む学生もいる。しかしこの礼拝の主要部分は十五分開行われる説教である。これには長老に限らず、総長、教授達の講話もあり、短時間ながら素晴らしい話をするので、学生達を惹きつけている。この始業礼拝は僅か三十分で終り、八時半には鐘の音とともに学生は、各教室に消えてゆくのである。

午前の表情

語学の授業だとそうはいかないが、そのほかの教場には、まだ朝の寝覚めの眠たげな空気が流れている。寝坊助な学生が多いわけでもあるまいが、大休、学生にとって、第一時限の講義は、奇妙に早調に聞えるものらしい。何となく昨夜の名残りをとどめたような、呆んやりした顔が多い。ノットにペンを走らせて書きとっているうちに、いつのまにやらそのペスが止り、やがて思い直したように、再びペンを動かし始める学生がいる。講義の名調子に魅惑されたからでないのは、そのツマラナソな(ツ)顔つきでわかる。かと思ふと、最初からペンを執らない学生もいる。しかし、決して、教授排斥のサボではない。放心したように黒板の一角を見つめているからだ。多分、魂がまだ夜来の夢からその肉体に立戻っていないのだから。所が、こういう学生に魂が戻ってくると、コソコソ紙片に筆談で、何やら附近の学生との間に交渉を開始する。しかし無論勤勉な学生もいる。というのは、彼は次の時間にあてられるはずの語学の教科書の暗記に、夢中で没頭しているのだ。——などという誤解されては困るが、これはごく一部の学生の生熊なのであって、大部分の学生は勿論真面目に筆記しているのである。——こういうなかで、教授の声だけが相も変らずつづいていく。うつぼつとした背脊の活気が随々してくるのは、この第一時限の鐘がもう鳴ろうという頃なのかも知れない。なぜかといって、授業終了のどかな鐘の音を聴くと、忽ちいままでの眠ったような調和が破られてしまうからだ。花が咲いたように、若いどよめきが、学園の此処彼処に、一時に湧き起って、それがこだまのように伝わってゆく。

弱い冬の日も、ようやく輝き始めている。ぬれた芝生もいつしか乾きました。その芝生のベンチに三々伍々腰を下して行く学生のなかで、青春の明るさにそむく憂鬱な表情を浮べている連中は、学窓を去る日がある。月後に迫った四年生連だ。だれの顔にも疲労の色が刻まれている。これから行われる学生会の新陳代謝、就職試験、卒業論文、試験——そして、それらが終って、各処に塗別の宴のはられる学年末のあの季節を迎えるまで、ふだんは静穏な学園にも、異様に緊張した空気が立ちこめる一角があるのだ。

「決ったか？」
と、一人が何の表情も浮べずに聞く。相手も「今日は」という時のように、

「まだだ。」

と答える。二人とも、すっかり挨拶になってしまつた自分達の言葉の持つ意味に、今更驚いてもいない。しかし、だからといって、彼等が自分達の将来を軽んじていると思ふのは早計だ。この挨拶につづいて、彼等の間では、時計台の下に貼り出されている求人ビラの日ばしいものにつづいて、にぎやかな話題が展開されるのだ。そして、やがての朝、彼等の一人は、おなじこの芝生のベンチの上で、

「決つたよ！」

と答えることになるのである。

この憂鬱な四年生達にひきかえて、まだ当分の間、学園の温泉に包まれている連中は、ただもうこの解放された一ときを楽しめばいいのである。鐘つきの小使さんをつかまえて、オソルベキ交渉を始める悪童もいる。

「おじさん、今度の終りの鐘、五分だけ早くならしてくれよナ？」

小使さんは、ニコニコ笑つて相手にしない。

「頼むよ、おじさん！ 五分でいいんだ、そうすると今日は当てられずにすむんだからサ！」

授業開始の鐘を鳴らさねばならない小使さんは、この面倒な交渉をいい加減に切り上げる。

「ああ、いいともー！」

そして念までおして、第二時限の授業に臨んだこの悪童が、語学の邦訳にシドロモドロに苦しみながら聞くのは、キチンと、授業終了の時刻に合せた鐘の音である。

三時限を終えて、残っている四時限の授業が休講ということにでもなれば、歓声が教室一杯にあがる。——もっとも、これはごくタマの休講ならの話だ。——時間は早い、何はともあれ、「自由な午後」のための腹ごしらえ！ 構内食堂に馳けて行く一群がある。サツサと校門を出てゆく一組もある。行く先は、おしるこ屋か、麻雀屋か、パチンコ屋か？ この中には、むろん、真面目なアルバイトに急ぐ恵まれぬ学生もいるだろう。

こうして、学園の静かな午前も、漸くその静かさを一隅から破られてゆく。そして、正午が過ぎ第四時限の終りに近くなると、講義の早く終えた教室から、一団一団と、学生が解き放たれてくる。

この頃の学生の足は、大概、構内食堂に向けられる。中には、四五人の男の学生に取囲まれて、華やかな色彩をふりまく女子学生もいる。そして、この大勢の学生達が、吸われるように構内食堂に消えてゆく。

この構内食堂でまかなっている軽食と、お茶、お菓子の類は例外なく安い。だから真理の学府に過わしく経済理論に沿つて、端的にいえば、値段通りの味である。けれども、財布には頓着しても味には頓着しないのがこの世の習いで、ここはこの時分にはいつも大繁昌である。広い食堂だが、どの椅子もいっぱいふさがつて、腰掛ける余地がなくなつてしまふ。

片隅のピアノに向つて長髪の学生が、ショパンのノクターンを、かなり達者に弾いている。ところがその優雅な旋律も、すぐそのわきで、カレーライスをむさぼり喰うヤブな学生達の哄笑に、

無残にも破壊される。しかし、これもはちきれる若さのためだ。若さの活気が、渦のように、ホール一杯に捲き上っているのだ。

こんな時、坊主頭の利口そうな少年が、ソッと椅子から立ち上る。そして、うつ向き勝ちに、あたりをばはかるようにホールから出て行く。

「あれがビッチャーの小島よ。」

と、その傍にかけた上級らしい女学生の一人が、相手に教える。

「野球の？ 学生服を着ると随分可愛いね。」

どうやら、女子学生は、多くの男の学生の間に混って生活してうちに、多分に「母性的」になつてくるものらしい。

どの学生も、食べることと喋べることで口がせい一杯急がしい。そして、この日の午後のスケジュールの決まるのは、大半がこの時なのだ。

午 後 講

一方、食堂のこの喧嘩をよそに、昼休みの時間になると、チャペルでは午講が行われている。この時には主として、代講(大勢の人数に代つて斬る)や、また学校のため、いろいろな学生諸活動のために祈りが捧げられるのだ。この午講のあとが、暇のある学生達は、長老や教授によって行われる聖書講義に出席する。

午 後 の 表 情

教養課程のものの達の授業はほとんど午前中で終る。だから、午後の学園はにわかには森閑とする。構内食堂の喧嘩も、せいぜい一時までが峠である。学園中で最も罪深きもの(?)である。三年生の専門科目の授業と、学生会それぞれの部活動が、午後の学生の仕事だ。

春から秋まで、シーズン中なら、体育会に属する各運動部の、猛烈な訓練の始まるのはこの時だが、各ともなれば大方がシーズン・オフで、わずかにウィングター・スポーツの各部が訓練に精励するだけである。しかし、シーズンのない文化会は、それぞれの部室に陣取って、その高邁な理想を話題に、相変わらず論議の花を咲かせている。演劇部の斬新な、かつ高尚な上演計画も、映画研究会のシナリオ募集も、社交舞踏部の一流ホールを借り切つてのパーティーの腹案も、予算を度外視した文芸部の遠大な同人雜誌統刊計画も、すべて、この時間に、それぞれの部室で創造される。——勿論、最も中心になる話題は、別項「行事さまざま」で説明する文化会の行事についてであるが……。

とまれ——午後は、学生達にとつて、それぞれの意味で、最も重要な時間なのである。勤勉な学生にとつては、図書館に籠って本と取組む時間であり、真面目な学生にとつては、それぞれの敬愛する教授を校外に連れ出しては、そのうるおい少ない財布から一杯のコーヒーを無心しつつ、真理に関する疑問を問いただす時間であり、生活力の旺盛なものにとつては、それぞれの必要乃至欲望

を満足させるための財力を得るがために働く時間であり、凡俗なものにとっては映画を観る時間であり、麻雀をやる時間であり、球撞きやダンスに上達する時間であり、或いはその恋人と恋を嗜く時間でもあり、観劇をする時間でもある。

圖書館

さて、その勤勉な学生のゆく図書館をここに紹介しよう。

さる日、英国の詩人ブランドン氏が本学を訪問したとき、時計台のある本館、右手のチャペル、左手の図書館の構成する建物の様式と、レンガの赤色をこの上なく賞讃し、故国の旧家をみるような感慨にうたれた。と述懐したが、落着いた、くすんだ色彩が、一代の大詩人の心にそぞろな地味を生ぜしめたのだらう。なにしろ、このレンガのしゅい色はいい。日本には珍しい色だ。そして、この落着いた、くすんだ、しゅいレンガの赤は、そのまま立教の伝統を反映し、学風を匂わせているといってもよい。

チャペルと図書館とは、立教の心臓と頭脳なのだ。秋の一日、殊に夕日の映えるころ、一歩この校門のなかに足をを入れてみたまえ。建物の形と色の織りなす寒気味のただなかで、誰もが「立教」を刻下に認識することだらう。

立教の頭脳である図書館は、こうした寒気味のなかで、くすんだレンガにまつわる鴛かづらの奥にヒッソリと位置している。正面に立てば、蔭に蔽われた入口の石に：*Samuel Livingston mather*、

と刻まれている。サムエル・リヴィングストン・メイサーとは、この図書館の寄贈者の名である。つまりこの図書館は、寄贈者を記念して、正しくは「サムエル・リヴィングストン・メイサー記念図書館」と称ぶのである。立教大学がまだ築地で「立教学校」と称していた頃からの沿革をもち、関東大震災のときは、かなりの被害をうけたが、今次の大戦にあたっては、幸いに殆んど災害をこうむらずにすんだ。

現在の蔵書は拾万冊前後で、大図書館とはいえないが、在学生の数から考えれば恵まれた蔵書だといえるだらう。洋書、特にキリスト教関係のものに貴重な文献をもっていることは周知のことであるが、さらに特色としては、我が国では数少ないオープン・システン（開架式）に上って閲覧させている点である。つまり書架が開放されていて、閲覧者は自由に好きな図書を検索することができているのだ。レポートを書くときなど、学生があちこちから抜き出した図書を机にうすたかく積みあげている光景は、この図書館では珍しくない。それから館外への貸出しも行われている。試験期には学生の借出す図書が相当量あるが、いつのまにかまた整然と書架に戻ってくる。新制大学になつてからは、新学制の趣旨に則って、図書館の需要はいよいよ大きくなり、ますますよく学校の頭脳という役割を果たしている。

赤いジュウタンをしきつめた床、それぞれのスタンドをもったデスク、高くほの暗い天井、そしてただよう静寂の気。ひっそりと落着いたこの図書館は、そのむこうに対峙するチャペルとともに立教生にとって聖なる殿堂なのだ。